

留学生教育を通しての研究メモ（実践内容）

大星光史

一九八九年四月、私は日本語・日本事情の教師として本学に赴任した。

勤務して十年の歳月が流れている。私の知る限りの留学生関係の事項をここにメモしておきたい。理由は次の任の教師のために、また、留学生と接する医・薬の教師・学生諸君のためにもならばと願ってのことである。勿論、ここに述べたことが全てでなく、極く一部、要点であることもことわっておきたい。

矛盾点から先に述べよう。

私は前にも述べた通り、留学生を対象にした日本語・日本事情の教師である。当然、国際交流会館の仕事、またそこに起居する留学生とも親身になって相談に乗り、講義も多くしてあげられるものと思っていた。しかし、あくまでも学部の教師で、国際交流会館とはシステムが異なるゆえ一線を画しておくべしと最初に言い渡された。私の留学生を世話してやりたいとの希望、親切心がモロクも挫折したことは事実である。以後、日本文学の教師として専念、その内に身を置くこととなった。

本学を受験する学部学生の留学生もここ十年間で数名はあった。が不合格。パスした学生も日本語・日本事情を選択せず、結局は、ここ十年間を通じ私は一度も留学生に関する正式の授業は無しで終わったことになる。

幸い毎週一回及至は月二、三回のペースで国際交流会館、講義室、私の研究室等で補講のかたちで一〜二時間彼らに接する機会があった。また、医・薬の教師から個人的に留学生を委され、ある程度の日本語に熟達するまでの期間（一〜三ヶ月）、週これも一〜二時間、研究室で個人的に教えたこともある。

その他、富山国際大学で一年間、非常勤講師をつとめた。これらを土台にして留学生の指導、講義要点のメモめいたものを綴ってみた

い。

しかし、その前にもう一つの矛盾——。正直言って私のような立場、言い換えれば殆ど学部授業のない専任教師が他大学はともあれ、本大学において必要なものか否か？やや疑問を感じざるを得ない。総合大学の場合、とくに文系には熟達した日本語と日本事情の教師も必要である。これについての理由はあとで述べる。本学では外部からの講師、非常勤で十分間に合うのではないか。

もし専任をどうしても他大学その他との兼ね合いで置かねばならぬとするなら、国際交流会館の仕事に深く立ち入るスタイルが必要であり、同時に他教科との兼任、とくに教養教育関係者、あるいは医と薬がせひとも必要とする分野の教師を選ぶのも一つの案である。それは日本文学、外国語教師、またかけ離れたところでは自然科学系の教員であってもよいと思っている。人文でなければならぬという必要性もないように思う。

講義・留学生メモの方に入って行きたいと思う。

留学生は若さと希望に溢れている。

その一方、この日本という異文化に触れ、且つ故国を遠く離れていることもあって、少々心細い者も居る筈だ。これは、どちらかといえばカナダ、ブラジル、東南アジアといった出身者に多いように感じられる。中国系の留学生は意外と同化しやすい感じを受ける。

接する時も、西欧、中南米、東南、南アジアの出身者には、その不安感、心細さをカバーして上げるやや意識的な措置、安心感を与える親しい接し方も必要かと思われる。

彼ら全ての留学生のよさは、こちらが親切であれば、それに倍する親しみをもって応じてくれる点である。留学生担当の教師は、いわば日本人の代表・象徴の一人であり、それだけに心して当たらねばならぬことと切に感ずる。同時に彼らは、そうした教師を通じて日本人全体を見るばかりでなく、できれば精神的にも頼れることを願っているかに思える。

以前、名古屋で開催された留学生関係日本語教育の研究会に出席した際、文系と理系に分けると留学生の型は明らかに異なるとの報告があった。理系の工学部や純粋の理学部にしてもここに来る学生は技術と実験に追われ、当の本人も日本に居る間にできるだけ早く且つ多くこうした技術を身に付けたいとの意欲で、日本語はある程度の会話が可能となれば敢えてそれ以上は求めない。いわゆる日本語教育から去って行く。それに較べ、文系は歴史、文学、社会、経済、日本の風俗、習慣といったものにも深い興味を示すと。

この傾向は本大学にも強く感じられる。医・薬の実験、技術のマスターがどうしても中心となり、日本語はほゞくに通じればそれで

よしとする風潮はある。事実、多忙で学会発表、実験に追われている日々であることも否めない。かといって日本の文化的なことに全く無関心かというとも言えない。今までの学生の内では、私の研究室から日本人の学生並みに多くの文学・社会的な本を借り出し読破していった学生も多い。

富山国際大学では東南アジア、インド、アフリカ、中国の留学生を中心に教えたが、彼らの興味は日本の経済、貿易、政治、社会の動勢にあり、その点とても熱心であった。私からそうした話を聞くことを好んでいたことを思い出す。留学生の抱いている将来の希望、展望、職業、個性に応じた教育も殊に必要であるとも切に感ずる。

例えば漢字を書いたり読んだりする場合、「書く」行為に関しては、漢字圏を除いた留学生にとっては苦手を越えて苦痛そのものであるようだ。私もかつて、エジプト、インドネシア、ブラジルの留学生に何とか漢字を覚えさせようと初歩の段階から手にとるように努力してみたが、このことはかえって彼らの負担となり、遂には講義に出席しなくなったという苦い失敗がある。軽くソフトにやったつもりであるが、今更に漢字に費やすエネルギーが専門外のものとしてはいかに大きいものかを痛感した次第である。ひらがなについては限られた文字数であり、中には見事な書き方のできる者も多い。国際大学では将来、日本の企業と取り引きしようとの意欲のあった学生達は、その好き嫌いを通り越して必死に漢字も覚えていた。何故なら契約書、その他の文書でも必要欠くべからざる文字となるとの理由からと思われる。インド、パキスタン、イランといった国の出身者であった。

一般に留学生は先ず、日本人との付き合い方、とくに指導に当たる教授への対応の仕方、その研究室での仲間と自分の立場にひどく気を使う。教授にどのように接し、どのような言葉遣いをしたらよろしいものか、周囲の日本人との会話は、また電話での対応は、となく神経を張りつめていることが、講義の際の質問時間に一斉に噴き出してくることでも見て取れる。

日本人のちょっとした動作、微笑や沈黙、「おじぎ」に文化の違いを感じるらしい。濟まなような顔をしながら実は断る。「ちょっと」とためらいを見せる。「考えてみます」。それに返事のおくれや沈黙は拒否を表わすことを知る。われ／＼が意識していないことどもを彼らは逆に明確に分析してみせる。

微妙な言葉のニュアンス「私は知らなかったけど……」（しかしながら、皆さんは知っていた）。「私は知らなかったけど」……のこと
を私は知らなかったんですよ」といった内容の違いに戸惑う。

敬語にはとても神経を使うという。社会的地位や年齢で自分と相手との関係が決まってきたとき、その中には、「行きます」「まいります」

「いらっしゃいます」といった丁寧語、謙讓語、尊敬語といった三通りの使い方があるということは、とても厄介に感じる。

「ご飯はお召し上りになりましたか」と聞かれたとき「お召し上りになりました」とつい答えてしまったりする。

動詞の受け身の形がある。

(イ) 呼ぶ → 呼ばれる (——れる型)

(ロ) 見る → 見られる (——られる型)

(ハ) 質問する → 質問される (不規則型)

すると、ここで「日本の詩人の解説がありました。そして先生は質問されました。」となると、(ハ)と混同してくる。勿論、話し手が先生を尊敬しての会話文であることに気付けばよろしいのであるが、単に「れる」「これる」の受身文の文法的知識で処置しようとする苦しみ結果となる。

「猿に畑を荒らされて困っている」「犬を放し飼いにされないように」と、日本語には留学生からは確かに判りづらい部分も多い。この辺をいかに多くの例文や具体的内容の中から把握させてゆくか。主に彼らとの会話、彼らの質問点に即して解答をきめ細かく支えてやる工夫が必要である。

時制(現在、過去、完了)も厄介である。

○ 絵を見る前を「見た前」(×)「見る後」(×)と間違っ用いたりする。「見る前」「見た後」「見る時」「見た時」等がいずれもよろしいわけだが、留学生と話しているとこちらが奇妙な錯覚に陥ってしまう時も往々にしてある。日本語の難解さは相当なものとの示唆を彼らから思い知らされたりする。

私(主語/動作主)は 友人(間接目的語)に 辞書(直接目的語)を 借りた。(他動詞)

こうした一見、日本人にとって当たり前のことが留学生に取ってはやや初歩的な関門であったりする。

中国系の留学生でも、よく動詞を先にして目的語を後にした会話をひよいとしたりすることがある。また接続詞、助詞を抜いたりする。中国語、英語をはじめとして殆どの外国語圏の人々にとって、日本語はその単語の組み合わせ、語順から難解な部分があったかと思われる。

しかし、日本を訪れる留学生は、本国及至は日本において少なくとも三ヶ月から六ヶ月、多い時は一年から三年位の主に会話を中心と

した学習を積んできている。

なかには文法にこだわり過ぎてかえって内容を困難なものとして自ら苦しんでいる場合もある。

やはり日本文、会話に馴れること、そこからの出発が大切であり、規則通りの文法を全ゆるるものに適応させねばならぬ、あるいは文法が何よりも優先し、不動のものであるとの先入観があると、スムーズさを欠き、行き詰まりを生ずる。これは、日本人であるわれ々が以前そして現在もそうした向きが多分にある内容かと思われるのが、文法重視、会話より読書に中心を置いた日本の教育法の弊害がある。これを逆に留学生の失策例から示唆され、教えられる場合もある。しかし、留学生の大部分は会話中心の教育を受けてきており、その面ではいわゆる日本人の中に入れても差し当たりは困らぬような実践教育に徹してきているかと思われる。それゆえ彼らの優秀さも伴うのであろうが理解度は早いし、応用面も比較的よろしいとの感じを受ける。

面白いことに彼らは擬音語や擬態語には大変な興味を示す。「いらいら」とか「ぶつぶつ」「かちっ(と)」「こっこつ」「くどくど」「こわごわ」「ふんわり」「がやがや」「うとうと」といった言葉の雰囲気、これを自国の言葉と較べてみるとやゝ楽しい部分もあるらしい。

不安や悲しみの「おろおろ」、恐ろしさの「ぞっ」と、「じろじろ」見る、「ひそひそ」話す、「てきぱき」仕事をするなど、こうした人の動作や声を表わすものを用いての会話をさせてみると一層効果があり、日本語への親しみや馴れを感じさせるようにも思われる。

また動物や自然、物のたてる音やその様子にも関心があるようだ。

昆虫の羽の音を「ぶんぶん」といい、風のそよぎを「そよそよ」という。「こっこつ」「こんがり」「ポロポロ」といったこうした単語のひびき、ここからの感触を楽しみつつ会話文に入る。これらも大切な作業の一つに思える。

日本の言葉には「コ・ソ・ア・ド」といった「この・その・あの・どこ」との代名詞、距離感覚等を示す語が往々にして用いられる。会話の中でも④「川端の名作、あれ何んといったっけ」とか、⑤「この映画の主人公は、あれだよねえ、すごい作曲家だよね」⑥「今日までレポート出さないと、ちょっとあれなんだよねえ」と用いたりする。

⑦⑧は話し手が直ぐ頭に思い浮かばない場合、⑨は相手も自分も分かっている場合、すなわち「それでは困る、大変なことになる」といった際に用いる。留学生にとっては、この面が理解しにくいし、難問である。

日本語では、自分に最も近い①「これ」(this one)、「相手に近い②「それ」(that one)、「二人から遠い③「あれ」(that one)、「分からないう④「どれ」(which one)」、「どうした」⑤「も」⑥「なに」⑦⑧「これは」⑨「この」⑩「この」⑪「この」⑫「この」⑬「この」⑭「この」⑮「この」⑯「この」⑰「この」⑱「この」⑲「この」⑳「この」㉑「この」㉒「この」㉓「この」㉔「この」㉕「この」㉖「この」㉗「この」㉘「この」㉙「この」㉚「この」㉛「この」㉜「この」㉝「この」㉞「この」㉟「この」㊱「この」㊲「この」㊳「この」㊴「この」㊵「この」㊶「この」㊷「この」㊸「この」㊹「この」㊺「この」㊻「この」㊼「この」㊽「この」㊾「この」㊿「この」

(that) 「そんな」(that kind) of、③では「あの」(that) 「あんな」(that of) ④では「どの」(which) 「どんな」(what kind) of と分けられる。英語では②と③は一つにまとめることができ、同様に「その」「あの」と「そんな」「あんな」も同じことがいえる。それだけ日本語は複雑になっているともいえるし、良い意味では細分化され、明確な指示、ニュアンスの微妙さを表わしているともいえる。

同じことは方向を示す「こちら」「こっち」(this way)、「そちら」「そっち」(that way)、「あちら」「あっち」(that way)、「どちら」「どちら」(which way) にもいえる。

留学生は英語よりずいぶん余分に日本語としての特色を学習する必要がある。これは先に述べた敬語表現の多様性にもいえるし、漢字を覚えること、更にひらがな以外にもカタカナも覚えて置く必要がある。私が留学生だったら、日本語は他の国々の言語に比べ大変な代物しろものだったんだなあと思わざるを得ないと妙に感心することがある。

日本語の中には、かなりの外来語も入ってきている。

「コピー」「トラブル」「ワープロ」「パソコン」「アドバイス」「テスト」「クラス」といった他に、「省エネ」「口コミ」といった日本語と英語が組み合わせたもの、「急ピッチ」「消しゴム」なども同様であるが、こうしたものへの対応も意外と留学生には受けるもの、すなわち興味をもって受け入れられるものがあるかに思える。

「OL」「マイカー」「コストダウン」なども外国語を基礎にこれを日本ナイズしただけに面白い内容かと考えられる。

説明すれば留学生の関心を惹き、日本語を面白く学ばせていけるものもある。また現代では日本語として覚えておく必要も生じている。先に擬音語、擬態語について記してみたが留学生個人に直接関連するもの、例えば「おなががべこべこ」とか「めちやくちな状態」「べらべら話す」「にこにこ」「ほっとする」「ぼうっと」「ぐたぐた」「のどがからから」「ばくばく」「ぐうぐう」こういった言葉はとも興味を惹きやすい。この辺から導入した自己表現の会話スタイルも一つの勉強法、指導のあり方に通ずると思われる。

流行語にも留学生を相手にする場合、教師はある程度、敏感でなければならぬ。

お茶する(喫茶店に行く)、超…(すごく)、かったりー(かったるい)、まじー(本当?と聞き返す)、爆睡ばくすいする(熟睡する)、ノリい(ノリがいい)、はまってる(夢中になる)、イチ押し(一番のすすめ)、めっちゃ(強調語)、ぶっちぎる(「ぶっちぎる」から)、ダサダサ(かっこ悪い、みっともない)……。

その持つ語のもと、語源?とでもいふべきものを教えて、二、三回使ってもらい、日本語の会話の中で活用してみることによって、自

分のものとして利用が可能になるかと思われる。但し理解する程度にとどめておいた方がよさそうだが。

留学生を教えていてテキストからの質問にも勿論その熱気が感じられるが、何より生活、日本での体験を通しての疑問点、これが最も強い関心と呼んでいるかに思える。

彼らの内の数名が日本人の家をたま〜訪問する機会があった。玄関、廊下、畳とある。靴はどこまで履き、どのようにしたらよろしいものか。挨拶は？言葉の用い方、動作、土産の品は何が適当か？いくらくらいの値段のもの？帰る際の言葉遣いと動作……。

日本人であるわれ〜にとっては分かり切ったことも、彼らにとっては至極マジメな疑問、質問の数々である。

ある中国の学生は、日本人のお客が訪れたので帰りにその人をバス停まで送っていったという。お客は多少奇異な感じを受けたようだという。「何故か」と。

中国では、部屋や玄関で挨拶し、そのまま客を見送る程度では、これは親切心がなく礼儀を欠く行為だという。ある地点まで一緒に歩いて行く。これが当然で親しみを籠めた作法だという。

お国柄の違いが明らかに出る。

インドネシアでは、病院に勤める医師は、朝の八時から午後二時まで勤務し、その後は午後四時から九時まで自宅で医師として開業してもよろしいそうである。収入は両方から入るわけだが、国によっては実にさまざまな部分に違いのあることに気付く。

私はかつて日本語・日本事情の教師となつて本学に赴任した当初、富山の友人に一夕招待された。彼は中国との友好関係の仕事にも熱心であつたところから、「大屋さん、留学生で希望者があれば幾人でも小生宅に案内して下さい。宿泊もよろしいですし、富山の名所各地を案内したり、私の知人、友人にも紹介。面倒をなにかと見させてもらうよう努力します。大いにわれ〜を利用して下さい」と、有難い言葉を頂戴した。私も当然、留学生に希望があれば、世話になる部分も多いこととその申し出を喜び、且つそうした機会もやがて訪れるであろうことを期待していた。しかし、前にも述べたように国際交流会館での留学生の生活にタッチすることは職務の権限外であり、正式に教えるのは学部学生で、それと補講程度に限定せざるを得ない事情となつた。この件ではやはり、留学生の生活を豊かにする上でも、日本を更に知りたいと願う人達のためにも、計り得る便宜を掌中している際は積極的にかかわる方が留学生のためにもなつたかと思われる。但し、本学の留学生は文系の学生と異なり、かなり多忙で、またそうした日本の家庭、地域の実情を知ること、体験学習にはその時間を惜しむ人達も多かつたかとも察せられる。富山国際大学の留学生の場合は、教えた期間は僅かであつたが、明らかにその意志、

日本を機会があればぜひ知りたいたいの希望があり、非常勤講師の私にもその点ですごく親しんできた。だが他大学の学生であり、いかに彼らが望んでいてもホームステイや、私の友人にいろいろな面倒を見てもらうというわけにいかなかった。これらをなすことはまさしく越権になるであろう。

もう一つ、現在の国際交流会館での日本語の講師はみな立派な人達かと思うが（実際は私にはそうした講師を選ぶ権限もなく、未だに一面識もないが）、やはり同じ留学生関係の教師として相互間の紹介があり、打ち合せや相談もあってもよろしいのではないかと思つてゐる。

かつて私は、そうした専任の講師の他に、多くの留学生、家族のために県内からこれと思われる文化人、自然科学の研究者、郷土史家などを毎年二、三ヶ月交替で話してもらふ機会をつくりたいと思ひ企画してみたが、予算の面と、国際交流会館の仕事に深くタッチできぬ仕儀で実現しなかつた過去がある。私の情熱の不足というより、システムのものが作用していたかと思える。他大学では学部と国際交流会館的な生活分野、一般留学生との区別はなく、そのワクを取り払って「留学生」というかたちで世話し、公私両面に立ち入つてゐる所も多いかと思われる。今後の課題の一つではなからうか。

これらのことは、現役の時に口にするに、改革や、何か不平不満、盲点の指摘と取られがちである。去るに当たっては留学生を活かす良い方法の一つとして、こうしたスムーズさがあつてもよろしいのではないかと書き残しておいてみた。もちろん現制度がよりよいものであるればそれはそれでとの思いもある。別にこだわるわけではない。

学校内だけでなく、留学生が地域の人々、研究生生活外の日本人と触れるのも非常に大切な内容ではないかと思われる。実際、私の所へ来て学んでいた学生の中には、そうした機会を切望していた者も多かつたかと考えられる。多数の各分野の日本人の言葉、発音、考えに触れてみることも大事である。

ともあれ前にも簡単にしるしたことであるが、留学生は、先ず電話のかけ方、その対応に苦しむ。

とくに電話の相手が日本の学生（研究仲間）か、上司（教授その他）か、女性、男性、子供によって微妙にその話し方に変化を生ずるものがあると感じ取つてゐる。

電話には独特の決まり文句がある。

○かける時は

～さんのお宅ですか

～と申しますが

～さんいらっしゃいますか

～さんお願いしたいんですが

○受ける時には

～でございます

～どちらさまですか

～お待ちください

一般の標準的な文例を上げてみた。最も苦勞するのは尊敬語、丁寧語、謙讓語等のやゝこしきである。

電話をかける相手方が目上か目下か同等かということ以外に、電話口に出た人が、自分より年齢的に上か下か、性別の違い、現状での判断はいかにあるべきかなど大きな問題も抱えている。

とくに留學生が先ずこころ配りするものの直接的なものは、自分が属している研究室での教授、助教授、その他の先輩、殊に教授に向って話す場合の言葉遣いである。やゝ馴れてきてもうっかり仲間と話しているような会話がつい口を突いて出てしまう事も往々にしてあり、また妙に言い回しがぎこちなくなっている自分に気付くことも多い。これらについての彼らの質問が「ノック」する時の言葉の表現から始まって、かなりと神経を使っていることが随所に窺える。

さて、さまざまな分野からの留學生についての感想、講義での対応、問題点などを記述してみたがまだまだ言い足りぬところ、ぜひこの際述べておいた方が、何らかの参考になるのではないかと思われる事も多い。しかし、一応この辺でペンを措きたい。

彼らはその出身国のカラーを色濃く漂わせている。それ故に皆が共通の空間として身を置くこの日本、その日本についての情報、その風俗や習慣や伝統的行事、日本人の歴史や心情的なものに目を輝かせて知ることを欲する部分もある。これを学習や教科書的に取り上げると途端に興味を失ってしまう。この辺のあつかいがとても面白く且つ厄介で難しい雰囲気がある。

たどくしいながらどの留學生もひらがなだけは読めるし、書ける。しかし、カタカナになるとやや差が生じ、漢字になると決定的な

個人差、お国柄の差が生ずる。とくに漢字を「書く」となると、これは前にしるしたように厳しい現実が生ずる。

ケースバイ・ケースで教える緩急の妙を留学生関係の教師も、付き合う人々も心しておく必要がある。

作文を手がけたこともあるが、論文の添削なども徹底してやってやるべきだったと今にして思うこともある。もちろん一時は実践していたこともあるが、必要に迫られた論文でない限り、留学生に論文を書かせ、その添削というのは難しい。とくに補講の段階では、彼らは興味を失い（というよりも苦痛に感ずる）、勉強からの逃亡？をはかる。何よりも実験その他で忙しいことも、その理由にあるかと思うが。学部学生として「単位」の範囲内でみっちり身につけてもらうのも一つの手かと思う。

レポート、視聴覚教育、日本人の「病氣と死生観」、日本の「詩人、文人、俳人」などと彼らに問題を投げかけ、その様子、関心の程度を探ってみたこともある。

ただ印象に残ることが一つある。

彼らを教えていて、同じ出身国の一人がその語意を解せず難渋している際には、同国の一人が母国語で解説してやることもある。もちろんその意味は容易に理解される。しかし、彼らは、私や他の国の人の前で、たとえ同じ国の出身者同士といえども、その他のことで敢て母国語で話し合うということは滅多にない。

私はこれを彼らが「遠慮」している、周囲に深い配慮を、強いていえば、留学生の「やさしさ」であると解してきた。

富山国際大学でも感じたことがある。偶然、帰途に中国人グループの車に乗せてもらったことがあった。五人乗りの真ん中に座して、私はフィに異郷にあるような心細さを感じたものであった。まわり全員が中国人であるというのは奇妙な感じを与え、日本にあって日本人の私がむしろ異邦人となる。彼らはその際、私に対してばかりでなく、仲間同士でも全て日本語で話してくれた。ホッとする思いがあったことを記憶している。

私はこの十年間留学生諸君から数え切れないほど多くの知識や勉強法、世界の人々と携わる喜び、貴重な体験を得させてもらっている。なかならずく国境を越える人間的愛情をも感受させてもらったと深く感謝している。留学生も日本人もともどもに安心して自由に遊び会える時代、世界の交流、地球全体の温み、住みよさの時代の到来が望まれてならない。